

原稿校了後の前兆変化について

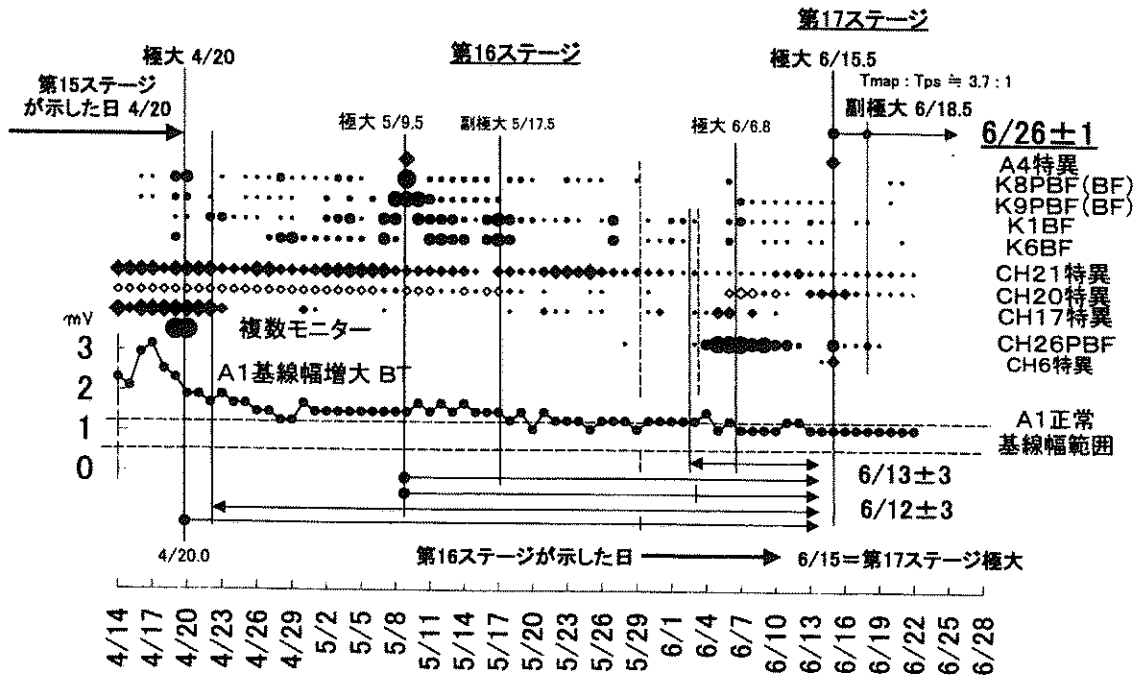
八ヶ岳南麓天文台 Yatsugatake South Base Observatory 山梨県北杜市大泉町谷戸8697-1 研究室 FAX 0551-38-4254
Astronomical Observatory: SINCE 1985 Earthquake Forecast Observation & Research: SINCE 1995

No.1778 長期継続前兆 第17ステージの関係見直し 6/15.5極大~6/18.5副極大の可能性 → 6/26±の可能性
CH21前兆が6/23に終息した場合=6/26 6/24に終息した場合=6/27 6/25に前兆継続の場合は再考

No.1778の最終前兆認識のCH21特異は、本日6/22夕刻時点で弱く継続中です。日中の時間帯はスプラインが顕著で不明です。今までCH21は特異状態が継続出現しており、スプラインが出現した場合でも無反応でしたが、本日は他観測装置と同期して大きく変動しました。実に8年ぶりのことです。17時過ぎ、スプラインが収束しましたが、CH21はまだ基線電圧値が低い状態で、特異状態継続と認識されます。このため、近々の場合でも6/25昼前までの発生の可能性は極めて低いと推定されます。

第16ステージが示した6/12±6/13±が第17ステージ(現在)の初現を示していた可能性を考えておりましたが、この場合に推定される発生時期の誤差を越えることがある程度明確なため、明らかに認識間違いであると思われます。従って、誤差範囲で6/15極大を示していた可能性が高いと再考。初現は前兆が継続しているため認識困難。従って継続前兆のCH21特異の終息を待つこととなります。

但し、6/15.5極大を作ったCH26-PBFが6/18.5に再びやや顕著に一日のみ再出現しました。他に6/15.5極大を作った前兆出現



観測装置の前兆が再出現したものはありません。このCH26-PBF再出現(顕著)が副極大である可能性を考えました。

主極大~発生= Tmap 主極大~副極大間= Tps としたとき、Tmap: Tps=平均 3.7:1 誤差範囲= 3:1~4:1 の経験則があります。浅い地殻地震特有の現象です。今回は主極大=6/15.5

副極大=6/18.5 と認識しますと、Tps=3.0日となります。現時点でCH21の前兆が継続中であることから最短の6/24±は否定可能。

平均の3.7:1 では⇒6/26.6±推定
最短の 3:1 では⇒6/24.5±推定
最長の 4:1 では⇒6/27.5±推定

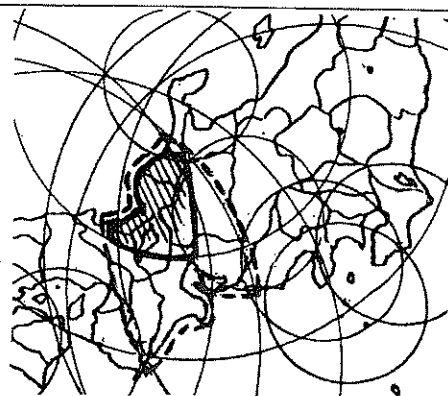
- ◆推定領域: 右図
 - ・大枠推定領域=点線領域内
 - ・推定領域 =太線領域内
 - ・参考推定領域=斜線領域

◆推定規模: M7.8 ± 0.5
(参考: 火山帯近傍地殻地震前兆=M6.7 ± 0.5 を示す)

◆推定時期: 6月26日 or 27日 ↔ 6/23~24静穏化が条件
※上記は 6/23~24に前兆静穏化した場合に限る。6/25段階で前兆継続の場合は、その後の観測を鑑み再考し続報予定。

◇推定発生時刻: 午前9時 ± 1 (又は午後6時 ± 3) ※上図は最も考えやすい前兆出現影響局から求めた推定領域(太線内領域)です。可能性低いですが、影響局誤認の場合は全く異なる領域となります。仮に別の領域での発生となった場合は陳謝致します

◇推定地震種: 震源浅い陸域地殻地震



本日深夜に終息した場合は6/25午後の可能性は否定できませんが、平均値の6/26又は6/27を示す可能性が考え易く、この場合◆6/23終息⇒6/26 ◆6/24終息⇒6/27が計算できますので、23,24日のCH21の状態に注目。6/25段階で終息していない場合は、副極大認識が間違っていることとなります。続報にご注意下さい。